

③ 調布市立図書館

市民文化活動の拠点に

黒沢克朗

一 調布市立図書館の概況

① 調布市の概況

調布市は、一九五五年調布町、神代町が合併してできた市である。昨年度市制三〇周年を迎え、さまざまなイベントが行われた。副都心新宿へは、京王線で一分、東西に京王線と甲州街道、北東から西南にかけて中央自動車道が横断している。人口は一八万七千人、典型的な近郊住宅都市である。

② 図書館の概況

一九六六年に中央館が開館してから調布市における図書館活動がはじまった。一九六九年に、分館第一号の国領分館が開館、以後、年次的に分館を開館し、中央館を含め一一館を数えるに至った。単独館が五館、残りの六館は保育園、地域福祉センター、児童館などの併設である。一〇館の分館のうち、六館は三〇〇㎡と小規模だが、若葉分館、染地分館や佐須分館は五〇〇㎡と、比較的大きな分

館である。

③ 運営方針

調布市立図書館は、市民の参加と協力のもとに、自立した市民の連帯と地域に根ざした市民文化の創造に向けて積極的な図書館活動を展開していく。

① 買物カゴを下げて、誰れでも気軽な立ち寄れる図書館づくりを目指し、市民のだれもが自由に図書館サービスを受けられる様にサービスの拠点を広げていく。

② 座して利用を待つという静態的な活動に終始することなく、積極的に図書館側から市民に働きかける動態的な図書館活動を目指す。

③ 子どもに良い読書環境を整備するため、各館に独立した児童室を設け専任の職員を配置し、館内、館外に対しあらゆる機会をとらえて児童サービスを行う。

④ 市民の身近かなところで文化的事業（講座、講演会、著者を囲む読書会、座談会、名画鑑賞会等）を開催し、文化創

造の拠点として積極的な図書館活動を展開する。

⑤ 市民に充実した図書館サービスを保障するため、種々の機会をとらえて組織的に研修を行い職員の資質の向上をはかる。

④ 司書職で採用

調布市では一九六九年から「司書職」という職名制度を採用し、有資格者を別枠で採用試験を実施してきた。これによって、職員は大部分が有資格者であり、ずっと図書館の職場で奉仕を続けることができる。これによって、司書の質的向上と専門性を深めることができるのである。

図書係三七人は、成人奉仕二三人、児童奉仕一四人で、サービスをしている。月二回、成人奉仕分科会、児童奉仕分科会をもち、それぞれに研修を重ねている。児童奉仕分科会では、三年余りをかけて作成した絵本のリスト「このほんよんでノ」一歳から六歳までの絵本――

- 一 調布市立図書館の概況
- 二 調布市立図書館の図書館網
- 三 児童サービス
- 四 集会学習活動
- 五 調布市立図書館の将来像

を昨年十月に発行した。市民の方からの反響は大きく、来年度再版の予定である。これは調布市立図書館としての第一号の記念すべき発行物である。

この二つの分科会のほかに、ハンディキャップサービス研究会、レファレンス研究会、中学生サービス研究会など、それぞれに別かれ研鑽している。

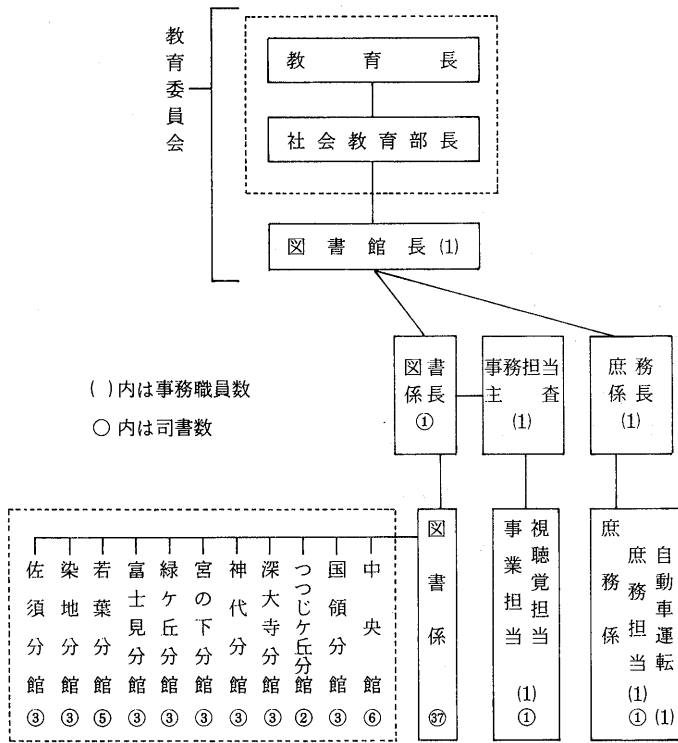
また、職員会議が月一回、チーフ会議（各館のチーフが一人、分科会のチーフが一人）が月一回、それぞれ会議をもち、図書館内の横のつながりを密にしている。

調布市立図書館では成人奉仕、児童奉仕、ハンディ・キャップサービス、視聴覚ライブラリーなど幅広く活動しているが、ここでは、図書館網、児童奉仕、集会・学習活動について紹介していきたい。

二 調布市立図書館の図書館網

日本で本格的に移動図書館（ブック・モビル）が走りだしたのは一九四八年高

図一 組織図 (昭61・3・31現在)

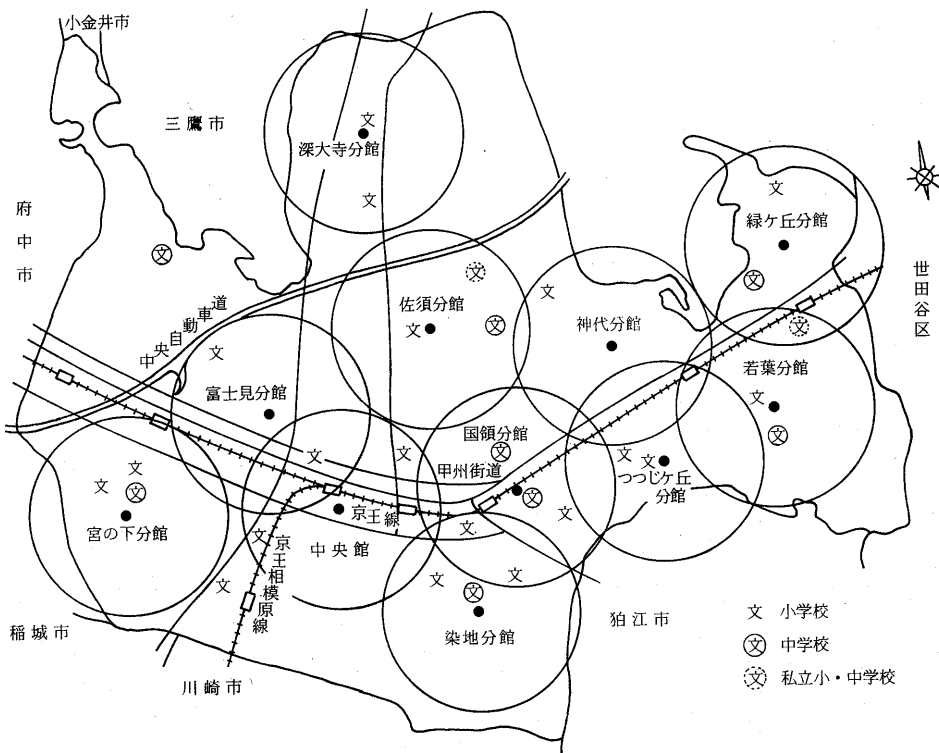


知・鹿児島県の県立図書館が最初である。一九六〇年代後半に入ると、市区町村の図書館が移動図書館を始める新しい動きが生まれた。そのきっかけを作ったのが日野市立図書館である。

調布市においては、①移動図書館は本の貸出だけに終わり、文化の拠点にはならない、②児童奉仕・レファレンスサービスなどが十分にできない、③時間に制約がある、などの理由で当初から図書館網をひくことを目標とした。

苦しい財政の中で、図書館網を整備する意図としては、第一に、住民の主体的学習権を保障するためには従来の縦割行政的な社会教育、図書館行政では応じることができない。よって、新しい時代に

図一 調布市立図書館網



ふさわしい図書館を整備することによって、学習の機会を十分に実現する。第二には、図書館づくりに住民が参加することによってコミュニティづくりを体験し、文化創造の基盤とする。第三に、図書館サービスを市民の中に定着させるには、子どもの時代から読書の習慣をつけることが重要である。以上の三点を軸として、左記のような三原則を満たす分館配置をすすめていった。

①人口二万人に一つの図書館

②半径八〇〇mに一つの図書館

③二つの小学校区に一つの図書館

この原則と、現在の図書館網を照合してみると、一館平均のサービエリア内の面積は、一・九八畝、人口は一万七千人、小学校数は二・一校と、日本の中でも高い水準に達しているといえよう。

このように図書館網を整備してきた。これから利点や問題点について少し述べていきたいと思う。利点としては、あえて書く必要はないと思うが、図書館が市民の身近かなものになっているという事である。市民の二〇%以上の人が登録している、年間七〇万冊の本が貸出されているというデータが、それを如実に表わしていると思われる。

次に図書館の本の貸出は無料であると言われているが、調布市の場合はそのにびったり当てはまっている。図書館か

ら遠方に住んでいる人たちは、何らかの交通機関を使い、図書館まで足を運ばなければならぬ。まだ足を運べる人たちはいいが、子どもや老人にとっては、図書館へ行くということは大変なことである。図書館で本を借りることは無料でも、交通機関を使うと多少ではあるがお金がかかる。調布市の場合、二〇分歩くと、どこかの図書館に行き当たるようになってくる。前館長、萩原祥三氏の著書「買物籠を下げて図書館へ」（創林社）のタイトルのように、調布市の図書館は歩んできている。

また、これから述べる児童サービス、集会・学習活動も、現在のような図書館網が充実していなければ成し得ることができなかつたと考えられる。

次に問題点としては、人口動態の変化によって地域によっては格差が生じている。また、前述したように小規模図書館が多いため、各館約三万冊という蔵書数には限りがあり、利用者のニーズには十分に答えることができなくなってきた。古い資料を保存しておくスペースもなく、蔵書に新鮮度がなくなってきた。このような問題を打開するために、一番新しい佐須分館では五万冊が収容できる閉架書庫を設けたり、昨年四月には中央自動車道高架下に二〇万冊が収容できる資料保存庫を完成させた。これらを

有効に使い、市民のニーズに答えていきたいと思う。調布市の図書館の資料だけでは十分に対応できない時は、都立図書館などを大いに活用し、市民に積極的資料の提供をしていく姿勢である。

とにかく図書館としては小さく、十分に対応できないことも多々あるが、本への窓口としては、市内に図書館が点在している。私たち図書館員は市民のために常に窓口を用意しておきたい。

三——児童サービス

子どもが大人へと成長していくためには、さまざまな栄養が必要である。食物から養分を摂ることによって、健康な身体を形成していく。しかし、人間として生きていく場合、肉体だけに栄養がついても人間らしくは生きてはいけない。人間らしく——と考えた場合、精神面にも栄養が必要である。心の栄養には環境、芸術などいろいろなものと考えられる。本もその中の一つである。その本と子どもを結びつける場所として、図書館の存在、そして司書の使命がある。世は、環境汚染、活字離れ、パソコン時代と騒がれているが、こんな時代だからこそ、子どもたちには本が必要なのである。調布市立図書館では、子どもの読書というものに重点を置き、児童サービスに力を

入れてきている。

①—選書

本を一冊一冊責任をもって「選ぶ」とが公共図書館の児童室の役目である。そのためには、本を読んで選ぶのではなくという見解にたち、現在「新聞書評の本の再評価」を行っている。一九七五年ごろまでは、新聞の書評欄に載ったからこの本は良いとか、あるリストに載っていたから良い本とか、本を全部読まないで選書していた。しかし、実際に手に取り読んで見ると疑問をもつ本や、推薦できない本も中にはあるということに気がつき、一冊一冊読むことにした。また子どもたちからは大人と違い、本の題名ではなく本の内容で聞かれることが多いので、本を読んでいなければどうしようもないということを感じたからである。

おもしろいエピソードとして、先日三年生の女の子に「おぼけのからあげの本なあい」と聞かれた。日本書籍総目録など、あらゆるツールを使い調査してみたら、載っていなかった。よく考えてみると「おぼけのてんぷら」（せなけいこ・作・絵、ポプラ社）が頭に浮かんだ。その本を見せたら、子どもはニッコリ／＼空揚げも天ぷらも子どもにとっては一緒のものである。

新聞書評の本の再評価は、具体的に次

のような手順で作業している。

① 新聞(朝日・毎日・読売・日経・サンケイ・東京)に載ったその月の書評欄を切り抜き、担当館はファイルする。それをカード化して担当館に送る。

② 担当館はそのカードを基に、その月の書評の一覧を作成する。

③ 中央館では一括購入し、児童奉仕分科会のメンバーを便宜上、奇数月・偶数月に分けた二つのグループのメンバーの所に本を送る。

④ 本が届いたら、本を読み、内容・評価・書誌的事項をかき、次のメンバーの所に送る。

⑤ 評価された本を基に、月二回行われる分科会の時、最終評価をする。

⑥ 評価してメンバーがすすめたいと思う本は「私たちのすすめる本」として、利用者や先生方に配付する。子どもたちにも、子ども向け用のチラシを配付している。

実際に、これらの作業を数年行ってきた、それぞれの職員の中に、本を読んでいるという自負はある。一カ月に数一〇冊の本を読まなければならないということは、たいへんなことである。絵本などは職場の中で読むことができても、大冊の作品は家で読まざるを得ない。しかし、こうして本を読むことが、図書館員としての質を高めることに役にたっている。

るわけである。

新聞書評に載らなかった他の本は、いろいろなツールを使い選書している。それらの情報も、新刊紹介という一覧を作り、各館に配付している。新刊書だけでなく、長く読みつがれてきて、破損・汚損の本は買いかえをしたりし、子どもたちが本を取りやすいように配慮している。

② 集会・行事活動

図書館は本を購入し、選書・整理・配架しておけば、子どもと本が結びつくかと言えは、決してそうではない。子どもたちにこそ、本と子どもを結びつけるいろいろな集会・行事活動が必要である。

調布市立図書館でも開館当初から、おはなし会、小学生読書会などを続けてきている。

② おはなし会

各館によって統一されていないが、最低月二回おはなし会を日常の業務として行っている。二つのグループ(未就学児、就学児)に分けて行っている館も多い。

未就学児は二〇分、就学児は三〇分位で、絵本の読みかせ、ストーリー・テリング、簡単なゲーム、本の紹介などをしている。

具体的に一つのプログラムをあげてみることにしよう。

△冬の季節Ⅴ——未就学児

・「てぶくろ」(ウクライナ民話、エフゲーニ・M・ラチョフ絵、福音館書店)——絵本の読みかせ

・指あそび

・「世界でいちばんきれいな声」(おはなしのろうそく11「東京子ども図書館」)——ストーリー・テリング

△夏の季節Ⅴ——就学児

・「ふしぎなお客」(イギリスとアイルランドの昔話)石井桃子編訳、福音館書店)——ストーリー・テリング

・本の紹介

・「じごくのそうべえ」(田島征彦さく・え、童心社)——絵本の読みかせ

おはなし会をしてきて、子どもたちに教えられることや、おもしろいと思わぬ事故にあつたり、私たち図書館員にとっては楽しい仕事である。今まではおはなしを語ってきて、人から人へおはなしを伝えていくことの大切さ、人間の生の声で語ることの大切さなどを心の中に刻み、これからも語っていきたいと思う。

④ 小学生読書会

小学校三年生位までを対象にしているのがおはなし会、四年生から六年生までを対象にしているのが、小学生読書会である。四月の段階で市報で会員を募り、五月から全館でスタートする。会員は各

館三〇人程度。当初は一冊の本を読み、

感想を言いあつたりしたが、小学生の場合、あまり意見がでてこない。大人のよりに人の意見を聞き、それによって感化されるということは不可能なため、毎月テーマを決め、ブックトーク(本の紹介)やストーリー・テリングを中心に行っている。

具体的な年間プログラムをあげてみることにしよう。

5月 ガイダンス

6月 食物のはなし

7月 おばけのはなし

8月 おやすみ

9月 おじいさん、おばあさんのはなし

し

10月 どんどん大きくなる、どんどん小さくなるのはなし

11月 紙を染めて遊ぼう

12月 クリスマスおたのしみ会

1月 調布ってどんなところ

2月 数字のはなし

3月 はじめてのはなし

小学生読書会を行ってきて、前項のおはなし会と同様であるが、子どもたちの文化や、今、子どもたちがおかれている現況の一端に少しではあるが、触れることができる。児童図書館員には、子どもを知るということが大切なことである。小学生読書会を通し、十分とは言えない

が、子どもを知ることができる。そのことが何よりも児童サービスをやっていく上での原動力となっている。

③ 学校への働きかけ

一九七五年に若葉小学校に隣接し、八番目の若葉分館が開館した。その際に読書指導は蔵書の不足した学校図書室よりもむしろ図書館で、専門に本を扱う司書によってなされた方が有効との考えが学校、図書館双方で一致し、全国でも珍しい事業が実施された。一年生～六年生までの担当者を一人ずつ決め、各担当者が月二回程度、若葉分館おはなし室で、四分の授業の中で、ブックトークやストーリー・テリングなどをしてきた。当初は先生方と図書館員のお互いの意志の疎通がなされず、やりにくい点もあったが、一年続けてみると、それなりの効果が出てきた。若葉小学校との連携は更にもう一年続けた。しかし、公立小学校は他にもあるし、それぞれの館の地域の子どもたちにサービスをしたいという意見が多く、職員からあがり、一九七八年から全小学校へ働きかけをするようになった。

いる。ガイドダンスは、夏休み前に行うようにし、対象は三年生。プログラムは、図書館利用の仕方をかいたパンフレット『としよかんのつかいかた』を説明したあとに、ブックトークなどを行っている。図書館としては読書指導をしているのではない。まだ図書館を利用したことがない子どものためや、利用していても上手に図書館を使う方法を知らない子どもたちのために、利用指導をしているのである。読書指導は本来先生方がするものである。図書館員は、それを手助けするために、資料を提供することが本来の姿である。

この数年、学校との連携の成果として次のようなことがあげられる。

- ① 登録率が高い——小学生の登録率は八五%。一〇〇%の学校が三校ある。学年別にみると、四年生が九五%、三年生が九一%となっている。
- ② 三年生のみならず、他の学年にもガイドダンスをしている。
- ③ 先生方からのレファレンスも少しずつではあるが増えてきている。
- ④ 地域の子どもたちと、より密接な関係をもてるようになった。
- ⑤ 先生方の研究会である調教研の図書部に毎回職員が参加している。夏休みには共同で『夏休みにすすめる本』というリストを発行している。

以上のような点からも学校との連携が必要である。しかし、この連携ができた背後には、子どもたちの身近かに図書館があったからである。

四——集会・学習活動

図書館活動の基本的な機能は、資料を提供することである。その機能を一層推進させるものとして、集会・学習活動がある。その活動が盛んになると、第一に不読者層を開拓することができる。第二は潜在利用者の発掘につながる。第三は図書館を身近かなものに感じさせる。

以上のようなことがあげられる。

これらの活動は、読書への啓蒙と図書館利用の促進を図るだけでなく、図書館が、読書によって生まれた学習意欲と、市民の文化的要求を育てる文化創造の拠点となることを志向している。

調布市立図書館でも集会・学習活動には力を注いできた。中央館が開館した一九六六年は貸出に追われたが、六七年・六八年ごろになると、地域文庫の育成、講演会、利用者懇談会、図書館見学会などを実施して、図書館の潜在利用者の顕在化を図った。六九年ごろになると、読書会の数が急速に増えはじめる。七〇年には俳句・短歌などの創作グループも生まれ、以後、その数は増加の一途をたど

る。

そして一九七三年には、図書館を核として活動している市民の自主的な読書会や研究会などのサークルの連合体である「調布ブッククラブ」が誕生している。

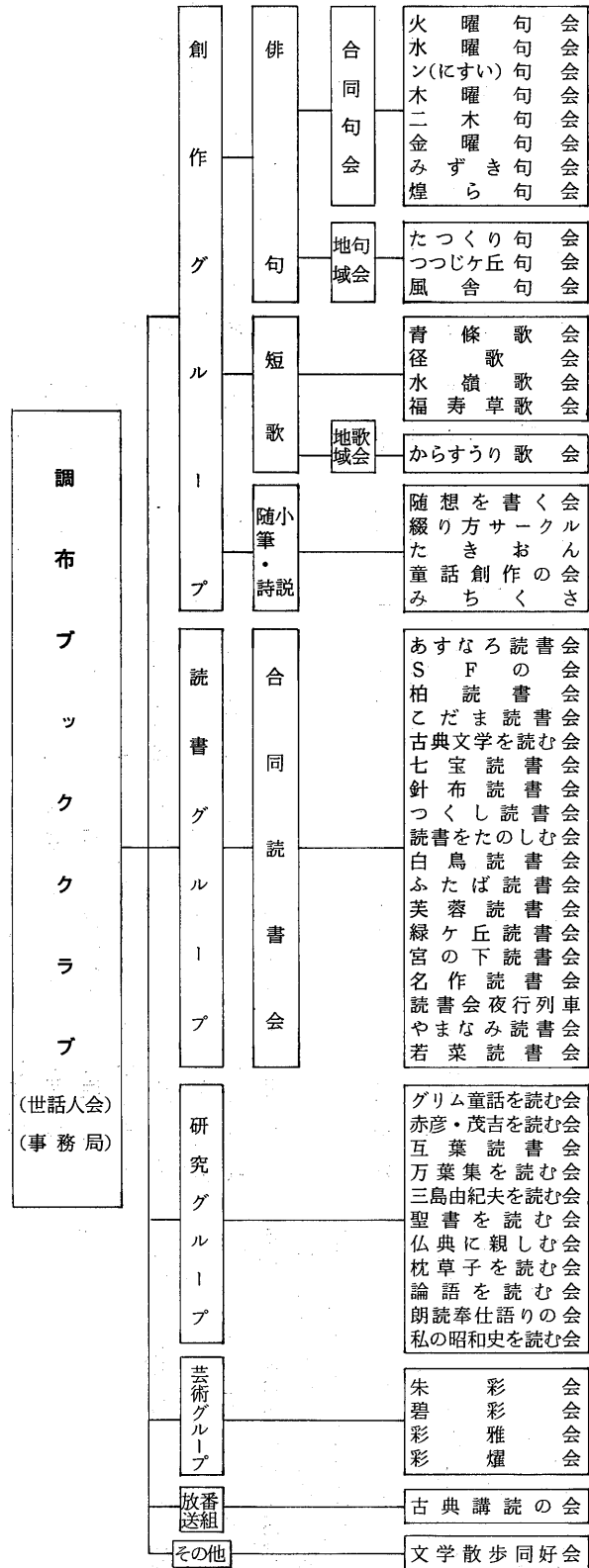
調布ブッククラブの目的は、開かれた市民の学習・創造の場の拠点となって、自主的な各サークルの連繫と生活に定着した活動を展開し、情報の交換、相互研修実践活動を通して個々を育(はぐく)み、知的共同体を実現することである。現在、読むこと、書くこと、そして、どう生きるかを考えるということをテーマに、図13のようなサークルからなる。会員は約七〇〇人。会員には、毎月一回ブッククラブ会報が送付されている。内容は一カ月の行事表、講演会、文学散歩などのお知らせ、会員が創作した俳句・短歌などが載せられている。

また図書館と調布ブッククラブの協力により開催している「図書館まつり」は例年二月～三月にかけて、各種講演会、映画会、市民句会、市民歌会などを多岐にわたって行っている。

今年度の事業の主なものをあげてみると左記のようになる。

- △教育講座▽
- ・「いじめ」「登校拒否」の原点をさぐる 6月28日 伊藤隆二氏
 - ・見える「いじめ」見えない「いじめ」

図-3 調布ブッククラブ



の 実 態 と 心 理 7 月 9 日 河 井 芳 文 氏
 ・ 「いじめ」の 深 層 と 克 服 7 月 18 日
 ・ 遠 藤 豊 吉 氏
 △ 著 者 を 囲 む 会 △

・ 「家 の 匂 い」 6 月 19 日 増 田 み ず 子 氏
 ・ 「日 本 青 年 は 健 在 だ っ た」 9 月 27 日
 山 本 茂 実 氏

△ 爽 や か 座 談 会 △
 10 月 19 日 山 田 太 一 氏
 △ 講 演 会 △

・ 「蕪 村 の 世 界」 11 月 6 日 山 下 一 海 氏

五 調 布 市 立 図 書 館 の 将 来 像
 ・ 「こ れ か ら 期 待 さ せ る 人 間 像 私 の 歩
 ん だ 道 を 通 し て」 2 月 6 日 藤 原 て
 い 氏 (P T A と 共 催)

調 布 市 立 図 書 館 の 今 ま で の 活 動 の 成 果
 と し て、図 書 館 網 の 完 成 が あ る。こ の 完
 成 に よ っ て、直 接 市 民 に サ ー ビ ス を し、
 地 域 を 知 り、そ し て 市 民 の ニ ー ズ を よ り
 深 く 把 握 す る こ と が で き た。し か し、小
 規 模 の 図 書 館 で は 限 界 が あ る。今 後、建

物 の 拡 張、改 修、シ ス テ ム な ど の 検 討 を
 し て い か な け れ ば な ら な い。
 そ れ に し て も 待 た れ る の が 新 中 央 館 の
 建 設 で あ る。現 在 の よ う な 規 模 で は 中 央
 館 と し て の 機 能 は 十 分 に 果 た す こ と が で
 き な い。一 〇 館 分 館 を も つ 中 枢 図 書 館 と
 し て、中 央 館 の 使 命 が あ る。将 来 二 〇 万
 人 市 民 が 利 用 し や す い 最 新 の 機 能 を 備 え
 た 図 書 館 が 早 急 に 望 ま れ る。た だ 機 械 化
 が 進 ん で い る か ら と い っ て、そ の 波 に の
 ま れ る の で は な く、そ れ ら の 機 械 を 有 効
 に 使 う こ と が 大 切 で あ る。機 械 化 が 進 む

ば 進 む ほ ど、人 間 に と っ て は、本 が
 必 要 に な っ て く る と い う こ と を、強 く 主
 張 し て い か な け れ ば な ら な い。
 ま た 都 市 化 の 急 激 な 発 達 に よ り 形 成 さ
 れ た 調 布 市 に お い て は、市 民 意 識 の 形 成
 の 場 と し て、図 書 館 の 使 命 が あ る。こ れ
 か ら ま す ま す 都 市 化 さ れ、機 械 化 が 進 む
 に 従 っ て、市 民 意 識 の 形 成 が 困 難 に な っ
 て く る。そ ん な 時 代 が 予 想 さ れ る か ら こ
 そ、図 書 館 の も つ 責 務 が あ る と 思 う。

△ 調 布 市 立 図 書 館 司 書 △